

東洋英和女学院大学 現代史研究所

# Newsletter

Toyo Eiwa University Institute of Contemporary History

第11号

発行日 2012年9月30日

## 日本から見た現代「アジア」、 「アジア」から見た現代日本

本学 国際社会学部 石井香世子

とうとう日本から出ることなく生涯を終えた明治生まれの筆者の祖母は、テレビ・ニュースを見ながら「白人じゃなく生まれた人たちは不憫だね」と有色人種を憐れんでいた。彼女は日本人を白人だと思っていたのだと思う。私はその言葉に驚いたが、何も言わなかった。「彼女はこの先外国へ行くこともないだろうから、現実なんて無理に知らなくてもいい」と思ったのだ。その頃、世界の富のほとんど80%以上は、世界の人口の25%ほどを占める「先進国」の住民のものだった。今から4半世紀も昔のことである。その後祖母は、わたしの予想通りに、日本から一歩も出ることなく、世紀が変わるころ穏やかに旅立って行った。たしかその直前まで、「アジアの子供たち」に寄付をしていたと思う。最後まで、自分のことを「可哀想なアジアの人たち」とは違う「日本人」だと思っていたのだろう。

多くの方は、この明治生まれの日本人の話に驚かれるだろうか。しかしもっと驚くべきことが、我々の身近に存在している。なんと平成生まれの日本人が、「アジアでボランティアをしたい」「日本に留学に来るようなアジアの人って、自分の国ではすごいお金持ちなんでしょう」と口にするのである。明治の女の「勘違い」はそっとしておいて良かった。しかし平成生まれの若者の「勘違い」は、放置しておいていいはずはない。

一昔以上前だっただろうか。日本のとある飲料メーカーが、東南アジアの日本食・緑茶ブームを察知してお茶のペットボトルを東南アジアで販売しはじめた。しかしこれが苦戦した。そして、ふと気付けば現地資本の会社が日本語名を堂々と冠したお茶のペットボトルを販売し始め、これが爆発的に売っていたのである。この二者の違いは何だったのか。前者は日本で売っているそのままの緑茶であり、後者は砂糖をたっぷり使った「(とても)甘い緑茶」だったのだ。しかもそのボトルには、堂々と「NON FAT」と書かれていた。「日本そのままの本物」がありがたいはずだと「勘違い」し、「緑茶に砂糖を入れるなんて」という感覚のまま東南アジアの陳列棚に並んだ日本のお茶はタイ人やマレーシア人のお客様に買っていただけず、タイやマレーシアの方々の嗜好と習慣を取り入れた「甘い緑茶」は売れたのである。これが何を意味しているのか。答えはひとつである。東南アジア諸国と日本との関係性は変化したのである。かつての日本人は、安い現地労働力を「使う」方だった。ところが、これからはタイ人やベトナム人といったお客様に買っていただく時代になったのである。しかし、それと同時に並行して日本の東南アジア諸国におけるプレゼンスは低下してきた。相対的な経済的地位が低下しているのだから当然の帰結であろう。

この現実を、どれほどの平成生まれの日本人が受け入れているだろうか。しかし、日本から見た現代「アジア」(いまだに雁行型発展の頭部分に在るつもり)と、「アジア」から見た現代日本(落ちてしまった国の見本)には、それぞれに乖離があることをまず受け入れるべきなのは、我々昭和生まれの日本人なのかもしれない。

# グローバル化下の若者

## 第1回 『若者』とは何者なのか ナイジェリア社会にみるその不満と暴力』

2012年4月19日 望月克哉 本学国際社会学部教授

今年度、現代史研究所では、「グローバル化下の若者」を“グローバルテーマ”とした連続研究講座を実施している。グローバル化が進む中で「若者」はいかなる問題に直面しているのか。この問題をいくつかの切り口から読み解くことが企画の趣旨である。

テーマの焦点となる「若者」あるいは「青年」とは、10代半ばから20代半ばの世代であり、国際社会ではユース(youth)とも呼びならわされる。就労年齢に達しても定職や定収が得られぬ「若者」が増えており、社会的な地位どころか家族も持てない年嵩の「若者」というのも珍しくはない。

こうした「若者」が政治家をはじめ地域社会の有力者による政治的操作の対象となり、しばしば暴力化してゆく様相の一端を、アフリカ社会を事例に紹介した。アフリカ諸国でも急速に都市化が進み、農業社会から急激な変貌を遂げつつある。肥大化する都市はもちろん、農村にも「若者」が滞留して、さまざまな不満を募らせている。厳格な年齢階梯が存在し、富や名声に対する願望はかなわず、努力も報われないことから、しばしば「若者」は群れ、暴力にはしり、集団的な不法行為も目立ち始めた。ドロップ・アウトなどにより、社会的・経済的に脆弱な「若者」ほど、政治的に操作されやすい。グローバル化の下、われわれの地球社会が大きく変化する中で「若者」はどのように生き、何を求めるのか。また「若者」に何を期待したらよいのか。本講座を通じて考えてみたい。



望月克哉先生

## 第2回 『若者と権利』

2012年5月17日

川上園子 公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本 活動マネージャー

アムネスティ・インターナショナルは、ロンドンに国際事務局を置く世界最大規模の人権団体であり、その日本支部で統括マネージャーをつとめているのが講師の川上氏である。父親の影響で社会問題に興味を持つようになり、ニカラグア大統領の国連演説が自らの出発点になった、と自らのパーソナル・ヒストリーを振り返った。

国際関係に関心を抱いて出かけたイギリスへの語学留学で、非政府組織(NGO)の存在に気づかされたことが契機となり、日本の開発支援団体での学生ボランティアを経て、NGOで働くことを志向するようになる。環境NGOでの活動の中で、ボルネオ島の先住民族との出会いがあり、人びとが自らの権利のために行動する姿を目にして、人権に目を開かれる。そんなとき誘いを受けて、川上氏はインドネシアの人権状況を監視するネットワークNGOに加わった。

こうして海外に目を向けてきた川上氏が、足元である日本の問題に出会うときがくる。日本で就労するインドネシア人研修生が「ボクたちは労務者じゃない」と語るような、この国の現状を知り、日本政府が第三世界の人材育成を名目につくった研修制度の下で、外国人研修生が不当な処遇を受けていることに気づく。グローバル化の中では、研修生や移住労働者もまた「見えない存在」であり、その権利を脅かされ、奪われている現状が、映像資料を用いて聴講者に伝えられた。



川上園子先生

社会の中で弱い立場に置かれている人びとの苦しみを共有し、こうした人びとの権利を守るための社会的合意を形成すること。人びとがその権利を奪われたとき、これに対抗できるような社会状況を作ること。このようにして人びとの尊厳、人間らしく生きる権利が保障される社会を追及すること、それが人権の視点をもつことであると川上氏は強調した。

### 第3回 『都市化と若者』

2012年6月14日 マリ・クリスティーヌ 国連人間居住計画 (HABITAT) 親善大使

マリ・クリスティーヌ氏自身、4歳から17歳まで海外で過ごした経験が、職業に結びつく語学の能力とともに、貧富の差というものに対する問題意識をも育んだと言う。

産業化と都市化が進む世界では、都市が豊かさの象徴であり、若者にとっても魅力的なものと映る。しかしながら今日の発展途上国における都市の現状は、豊かさからはかけ離れたものであり、富を求めてそこにやって来る人びとは厳しい現実に直面する。



マリ・クリスティーヌ先生

急速に発展する巨大都市は、しばしばプランニングを欠いており、上下水道はじめインフラ整備は後回しにされ、環境はバランスを欠いたものとなる。とりわけ都市における衛生管理は、人びとの生活を左右するものである。

都市のプランニングの有無が、きわめて重要な課題になる。衛生設備を欠いた生活を強いられる人びとが世界には少なくない。なかでも厳しい状況に置かれるのは子どもたちで、下痢症など、水に関連した病気で死亡する5歳以下の子どもの数は、毎日6千人にも上る。

若者に目を転じると、都市ではしばしば不安定な収入での生活を強いられ、健康を害する仕事にも就かざるをえない。失業がもたらす貧困の中で、犯罪や暴力にはしり、麻薬を常用する者もあらわれる。人身売買や性搾取が横行し、性感染症の蔓延も生じている。

こうした事態を改善する方策の一つが市民参加である。自らの居住地を守り、より良くする意識を醸成し、行動すること。コミュニティ作り、行動計画の策定等の取り組みは、スラムの改善にも力を発揮し、国連ハビタットの専門家はそうした場面でも活躍している。

## 第4回 『若者と雇用』

2012年7月5日

後藤千恵 NHK解説委員

冒頭、日本放送協会における解説委員の職務について紹介した後、御自身のキャリアを振り返ることで講演は始まった。社会部記者として「バリバリ」働いた30代を経て、40代で2児の母となって大きく人生が変わり、子育ての楽しさ、面白さを経験されたと言う。

今は時代の転換期にあり、日本社会に噴出したさまざまな課題が解決されないままになっている。懸命に働いても貧困状態から抜け出せないのが日本の特徴であり、グローバル化の下での価格競争により人件費を削減せざるを得ないこともその一因である。この結果、正規雇用と非正規雇用の間の賃金格差が拡大している。不安定な労働条件の下におかれて結婚できず、家族ができないまま高齢期を迎える人も少なくない。お金はなくても誰かとつながっている「貧乏」とは違い、社会からも孤立してしまう「貧困」がひろがっている。若い世代にも閉塞感は蔓延しており、自らの参加により社会を変えられると考える高校生は全体の3割に過ぎず、これが7割近くに上る他の国々に比べて著しく少ない。

仕事の意味とは、誰かのために動くことで、それが楽しさや、やりがいにもつながる。昨今のマニュアル重視の仕事を変えるのがワーク・ライフ・バランスで、「会社人間」と「社会人間」の違いがそこにある。最近、地域貢献や社会活動をやっている人、いわば2枚目の名刺をもつ人が増えている。地域社会の課題の解決を仕事にしてしまう人も現れてきた。若い人たちの感覚で、何が本当に大事かを考え、感じ、行動に移してゆく、それが社会の課題解決を可能にする。成熟社会での新たな豊かさ、幸せとは何か、を考える時である。



後藤千恵先生

2012年度 後期 現代史研究所連続研究講座 予定

### テーマ：グローバル化下の若者

回数	日程(予定)	題目(仮題)	講師
第5回	11月7日(水) 10:40~12:10	「若者と紛争」	橋本 敬市 JICA国際協力専門員(平和構築)
第6回	11月以降	「子どもの権利」	甲斐田 万智子 認定NPO法人 国際子ども権利センター(シーライツ) 代表理事

世界の複雑な現状を分かりやすくお話しします。皆様ふるってご参加ください。

本学 横浜校地にて。日程はポスターでご確認ください。

発行：東洋英和女学院大学 現代史研究所 神奈川県横浜市緑区三保町32

TEL 045(922)7272

FAX 045(922)7272

E-MAIL gendaiken@toyoeiwa.ac.jp